

編集後記

「くろしお」第六集は、土佐高校を昭和二十八年三月に卒業した者達の文集である。今年は卒業六十周年の節目の年にあたるので六十周年記念文集とした。

第一集（平成八年八月）は言ってみれば還暦記念号、第二集（平成十年二月）は卒業四十五周年記念号、第三集（平成十二年六月）は古希記念号、第四集（平成十五年十一月）は卒業五十周年記念号、第五集（平成二十二年八月）は後期高齢者記念号？となる。

今回はテーマを特にしぼったわけではないが、男女共学となった新制中学一期生として中学から高校卒業までの六年間の話を中心に人生を振り返る回想、回顧の寄稿が目立った。

出版に当たっては編集委員として第一集から関わってこられた川村愿さん、公文俊平さんをはじめ前号からの前田典彦さん、安部の他に高知同期会の池上武雄さん、伊野部敦子さん、関西同期会の上田隆右さん、鍋島淳子さんにも加わってもらって広く寄稿を呼びかけた結果、六月から僅か三ヶ月で延べ三十二名（一人で複数寄稿の人も）から力作、労作が寄せられた。

また、出版前から資金カンパのお願いをしたところ五十九名の方々から二十五

万円を超える多額の寄付を頂戴した。経費節減のため前号のような表紙カバーをつけるのを取りやめたが、お蔭で十月六日に高知で開かれた六十周年記念の同期会に記念号を届ける事が出来た。皆さんのご協力に感謝したい。

寄付をしてくださった方や希望者には順次お届けするが、若干余裕をみて二百部を印刷したので必要な方には一冊二千円（送料込み）でお送りする。希望者はご連絡いただきたい。

（安部 弥太郎）

電子版について

三年前の第五集を作る時の話である。『本』を作るといふのはたいへんなことだと思っていた私は出版には消極的で、電子版ならやりましようという前提で編集委員になった。原稿募集の紙には「・・・本にするかどうかは今決めずに、追って委員の体力、気力、・・・を勘案して決める・・・集まった原稿は電子的に保管し、希望する人にはメールで送る・・・」と、書いて貰った。結果的には、第五集の編集後記に私が書いたように、「安部委員の驚異的な体力と気力のお陰で」りっぱな本が出来た。

電子版の作成は、賛成して呉れた公文委員にひそかに期待していたが、健康を犠牲にしつつ仕事をしていたようなので、言い出しっぺの私が白紙から勉強する

ことにした。第五集の編集後記にはヤフーとグーグルをテスト中と書いてあるが、結局、私が昔から使っているニフティのココログを使って、原稿を他の人がネット上で見ることができるというミニマムの要求に辛うじて応えるものを作った。費用ゼロである。『本』が出来たので、同期の皆さんには有難味は薄いだろうが、土佐中・高同窓会のホームページに載せて貰ったので、後輩の誰かには「くろしお」が読まれていることは間違いない。

第六集は電子版が先行していたが、公文委員の一文と川村委員の句集だけで、私も一つ載せたが三本に止まっていた。ところが、出版の話が出ると、川村委員がフライング気味に寄付集めを始めたのがよかったのか、寄稿を強制気味に勧奨した新委員が居たのか、長短自由、手書きも可という安部委員の自己犠牲を前提とした条件がよかったのか、寄稿の嵐だった。今後の話であるが、電子版は続けたいと思う。本書中「喜寿の私達インド洋で泳いだのです」のような写真中心の軽い文に電子版は適している。もっと大きい熟女のカラー写真が見られるように、電子版用の原稿を頂こうと思っている。パソコンを使う同窓生が意外に増えないが、各種モバイルの進化が速いので、より広く見て頂けることを期待している。

<http://kuroshiodenshi.cocolog-nifty.com/>

(前田典彦)